

## 労働過程と価値増殖過程

中 尾 訓 生

本稿では「三篇、絶対的剰余価値の生産」(『資本論』I 向坂・訳)の最初の章である「五章、労働過程と価値増殖過程」が『資本論』体系においていかなる位置を占めているかに留意——『資本論』の各章、各節を解釈するさいには当然念頭になければならないことであるが——しながら解釈する。「五章」は「一節、労働過程」と「二節、価値増殖過程」に区分されている。

資本の一般定式、 $G-W-G' (=G+\Delta G)$  で表示されている  $\Delta G$  を、商品交換の下で(それは等価交換の世界であり、あるいは売り手は買い手であり、買い手は売り手であるという限界を有している。)いかに矛盾なく説明できるか。これが「四章、貨幣の資本への転化」における直接的な問題であった。

そして、問題を解く鍵として「労働力商品」の特性を指摘して労働力の消費過程である「五章」の生産過程へと問題を移す。

剰余価値 ( $\Delta G$ ) の源泉が定立されて「貨幣は資本に転化された」(『資』I・253頁)ということになるのであるが、同時にこのことは剰余価値はいかにして資本家の手に入るのか、を説明していることにもなっている。

しかし、ここで再確認しておくことがある。それは「資本家」と「労働者」の規定についてである。

「四章」、の末尾でマルクスは「わが俳優たちの相貌はすでに何かちがったものになっているらしい。先の貨幣所有者は資本家として先頭に進んでいる。労働力所有者はその労働者として彼の後に従っている。」(『資』I 229頁)と述べている。そして「五章」では冒頭から資本家と労働者が完全なる姿にお

いて登場するのである。

マルクスは貨幣所有者が資本家になった経過をそれ自体としては説明してはいない。

しかし、「五章」の解釈のためのみならず『資本論』全体を解釈するためにその経過を読みとっておく必要がある。

マルクスの諸概念の射程を定めるために必要なことである。換言すると、『資本論』に依拠して、いわゆる「国家独占資本主義」といわれる現在を把握するためには是非とも必要なことである。

実際、『資本論』はこのような読み方を要請する構造を有している。例えば、「流通」が説かれて「生産（＝労働）」に説き及ぶ構成はマルクルの勝手な都合によるものではない。

それは「資本主義社会」を総体において把握するために必要とされた方法である。

「資本主義社会」の総体的把握とはマルクスにあっては認識主体（＝資本主義社会の人間、労働者）の実践構造の把握ということである。私は「五章」の解釈をマルクスが「商品そのものが、使用価値と価値との統一であるように、その生産過程は、労働過程と価値形成過程との統一でなければならない。」（『資』I 242頁）と述べているところに従い、「五章」と「商品に表わされた労働の二重性」との関連を基底にしておこなうことにする。

この関連においてこそ「経済学批判」の根本を理解することができる。

「四章」での直接的問題にたいする解答は、「労働力に含まれている過去の労働力が遂行しうる生きた労働とは、すなわち労働力の日々の維持費と労働力の日々の支出とは、二つの全くちがった大いさである。」（『資』I 251頁）という労働力商品の特性の抽出によってあたえられた。

しかし、「四章」でマルクスが指摘しているごとく、労働力商品はある歴史的事実を前提としていることを忘れてはならない。

すなわち一方における生産手段と生活手段との所有者、他方には自分の労働力を売る以外は生活の術のなき人々、彼らが市場で再会するという事実。

「いかにして貨幣が資本に転化され、資本によって剰余価値がつくられ、また剰余価値からより多くの資本がつくられるかは、すでに見たところである。ところで資本の蓄積は剰余価値を、剰余価値は資本主義的生産を、これはまた商品生産者の手中に比較的大量の資本と労働力とが現実にあることを前提とする。したがって、この全運動は、一つの悪循環をなして回転するように見え、われわれがこれから逃れ出るには、資本主義的蓄積に先行する一つの本源的蓄積を、すなわち資本主義的生産様式の結果ではなく、その出発点である蓄積を想定するほかはないのである。」(『資』I 894頁)私は「資本」は以下のような構造を有しているものと解する。

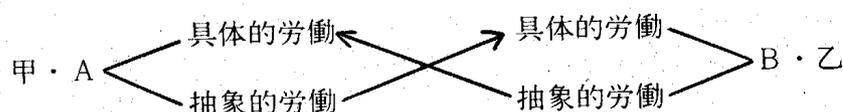
$$\text{資本} = \left[ \begin{array}{c} W-G-W \\ G-W-G \end{array} \right]^{(-)} + \left[ \begin{array}{c} \text{本源的蓄積} \\ \text{歴史的事実} \end{array} \right]^{(二)}$$

そして、この(-)と(二)を論理的に結合せしめたのが、労働力商品の特性である。

マルクスの展開は[W-G-W, G-W-G]からG-W-G'の形態を導出し、その内容を問題とし、ΔGの源泉を追求する。そして労働力商品の特性から貨幣の資本への転化を完了する。この展開でマルクスが苦心しているところは[W-G-W, G-W-G]からG-W-G'の形態の導出である。それは、マルクスが日常、観察される商品交換(W-G-W)とその商品交換の構造、すなわち交換者の関係<sup>①</sup>(W-G-W, G-W-G)を明確に区別しなかったことから生じている。

さて、(-)は市民社会の関係性を示している。「『自然生的な分業関係』すなわち即自的・媒介的な協働連関における、生産諸主体の集列的な関係一般のす

① 商品交換者、甲と乙の関係を価値形態論でマルクスは明確にした。甲はA商品、乙はB商品を所持している。



でもたらす」<sup>②</sup>ところの商品と貨幣の世界。

(二)によって、(一)で規定された主体が設定された。

(二)で設定された主体が資本家となり、労働者となり得るのは、(一)の関係性の下においてのみである<sup>③</sup>。

商品の章で、(一)を設定したところの商品所有者としての「私達」<sup>④</sup>はかくして資本家と労働者となる。

しかし、「私達」が二つのグループ（資本家と労働者）に実体的に分裂するとのみ解釈してはならない。労働者は資本家が人格化された資本として機能するにすぎないと同様に人格化された賃労働として機能するにすぎない。し

マルクスは上図から、交換が行われているということは

具体的労働・C

||

A・抽象的労働 → 抽象的労働 ← B

ということであるとした。

すなわち、商品交換の内実は差別なき、ある一つのものに還元されているということである。したがって、W—G—WはG—W—Gでもあるという関係性の設定がなされる。

商品交換には、前図に対照して次のような場合が想定される。それは、Aに表示された具体的労働とBに表示された具体的労働との交換である。この場合の交換比率は、どのようにして決定されるか。ということには、この交換は答えられない。

なぜなら、この交換は現実におこなわれている交換の背後で、交換者の隠された性格の表現であるから。かつて、マルクスは次のように述べたことがある。

「われわれが人間として生産したと仮定しよう。……(2)私の生産物を貴君が享受したり使用したりするのを見て、私は直接につきのことを意識する喜びをあじわったことになるだろう。すなわち私は、労働することによって人間的な欲求を充足するとともに、人間的な本質を対象化し、かくして他の人間的な存在の欲求にそれにふさわしい対象物を供給した、と意識する喜びを、……」(『マルクス経済学ノート』117～118頁、杉原・重田・訳)マルクスは、生産物を經由しての人間の本来的結びつきを語っている。

具体的有用労働とはもともと「個人的な生命発現」の活動を示すものであり、人間的な本質の対象化である。だから、具体的労働の産物は、共同的な存在の確証でもある。マルクスは商品交換の背後に、かかる視点を貫徹させていたとおもっている。それ故関係性の設定が可能になったとおもわれる。

「四章、貨幣の資本への転化」の「一節、資本の一般定式」において、マルクスが苦心している点は「貨幣を資本の最初の現象形態として認識するため」の方途をわかりやすく読者に説明しようとしていることである。

かし、この労働は資本家を満足させるが、労働者にとって苦悩でもあるが故に「私達」が有していたところのもう一つの性格は労働者だけが有することになる。この性格がいかなるものであり、そしてそれが論理上いかなる役割をはたしているかは「労働過程」の解釈で述べられるだろう。

(一)と(二)の設定方法の相違、したがって(一)と(二)の結合による対象把握には留意する必要がある。

例えば、マルクスは資本家を以下のように説明している。「この(価値増殖)運動の意識的な担い手として貨幣所有者は資本家となる。彼の一身、またはむしろその懐は貨幣の出発点であり、帰着点である。かの流通の客観的内容——価値の増殖——は資本家の主観的な目的である。そして抽象的富の取得

しかし、そのためにマルクスの叙述は混乱をしたように私には、おもえる。

「貨幣としての貨幣と資本としての貨幣は、まず第一には、ただそのちがった流通形態によって区別されるだけである。」(『資』I 190頁)とマルクスがいうとき、「ちがった流通形態」、すなわち、 $W-G-W$ と $G-W-G$ がどのようにして導出されたのか、を問題としなければならない。マルクスはこの点については何らの説明もしていない。

「商品流通の直接の形態は、 $W-G-W$ である。すなわち、商品の貨幣への転化および貨幣の商品への再転化であり、買うために売ることである。しかしながら、この形態とともに、われわれには、第二の特殊なちがった形態がある。すなわち $G-W-G$ という形態であり、……」(190頁)この場合、 $W-G-W$ が日常、観察されるものとして把握されているとすると、それと並んで、 $G-W-G$ が見いだされるというマルクスの説明に戸惑いを感じる。上衣1着—5000円—時計1個、というような形態から、5000円—上衣1着—5000円を私達は見いだすであろうか。

もし観察主体を異にするなら、それは理解できる。商人は貨幣を出発点とした形態を想起するであろう。なぜなら、 $G-W-G$ はその起動的動機も規定的目的も交換価値そのものであるから。しかし、使用価値を最終の目的としている観察者と交換価値をそれとする観察者を想定して「2篇」を解釈することは、ひき続くマルクスの説明からは、むつかしい。私は「1篇」を前提とするならば、 $W-G-W$ も、 $G-W-G$ もまず同じ内容を表示しているのであると解釈したい。

5000円(上衣1着)—5000円—5000円(時計1個)、5000円—5000円(上衣1着)—5000円、であってそれは近代社会の特徴を量の世界として、しかも、等量の結合として示しているのである。この点は、「価値形態論」でマルクスが明らかにしたところである。

(拙稿、「貨幣の資本への転化」を参照。山口経済学雑誌、23の5・6号)

② 真木悠介『現代社会の存立構造』36頁。

③ E・フロムは社会的性格というものについて述べている。「社会と社会におけるさまざまな階級や身分集団の成員は、社会体制が要求する意味に合うように、はたらくというやり方で行動しなければならない。社会の成員のエネルギーをつぎのようにかたちづく

増大のみが、彼の行動のもっぱらなる推進的動機であるかぎり、彼は資本家として、また人身化せられ、意志と意識とをあたえられた資本として機能する。このようにして使用価値は決して資本家の直接的な目的として、取り扱われるべきものではない」(『資』I・198頁) この説明は、(一)と(二)によって位置づけるとき「資本家」の骨格というようなものを浮かび上らせることができる。

資本家の倫理、規範あるいは行動目標といったものは、(一)から導出され、(二)によって彼は生産手段の所持者で経営者であるということになる。(一)は資本主義の精神というようなものを説明し、(二)によってその精神の体现者があたえられる。マルクスは彼らの姿を絶対的および相対的剰余価値の生産で具体的事実によってあますところなく述べている。私は、(一)と(二)の設定の差異に照応するところの(一)と(二)の射程の相違について注意を促しておきたい。

「資本は生産手段および生活手段の所有者が自由なる労働者を、彼の労働力の売り手として市場に見出すところにおいてのみ成立する。そして、この一つの歴史的條件は世界史を包括する。したがって、資本は初めから、社会的生産過程のある時代を告知するのである。」のいたして、「生産物が商品として表わされるのを条件づけるものは、社会内における分業がある程度発達して、直接の物々交換において始まったばかりの使用価値と交換価値との分離がすでに行なわれた状態にあるということである。しかして、このような発展段階は歴史的にきわめてちがった経済的な社会形式に共通である。」

(『資』I 220頁)

---

るのは、社会的性格のはたらきである。すなわち、社会の成員の行動は社会の型にしたがうべきかどうかを意識的に決定することではなくてふるまわざるをえないようにふるまおうとし、しかも同時に、文化の要求に合ったふるまいに満足を見いだすようにすることである。つまり、特定の社会の人間のエネルギーをこの社会が持続してはたらくように型にはめ動かすのは、社会的性格のはたらきなのである。」(『正気の社会』292頁世界の名著・続14所収・加藤・佐瀬訳)

私がここでいっている「関係性」は「社会的性格」と同じ作用をするものとして解している。

④ 拙稿「商品に表わされた労働の二重性」『山口経済学雑誌』27の1・2号。

後者が指摘している〔W—G—W, G—W—G〕と前者によって示されている「社会的生産過程のある時代を告知」としている事柄との結合によって生じた「資本」の検討は、当然のことながら両者の検討によってなされることになるだろう。

スウィージーは「今日の真の資本家は、個々の実業家ではなくて株武会社である。」と説明し、「株式会社」は「会社人種」(company man) とでも呼ばれる人々によって経営されていると述べている<sup>⑤</sup>。この場合、「会社人種」は「株式会社」を所有しているのではない。彼らが「株式会社」に統括され、それを経営するのは、それが現在においては、富の持続的な力や特権の源泉であるからだ、スウィージーは説明している。

私はこの説明は現実を適確にとらえていると考えている。この説明を、前述のマルクスの「資本」概念を(一)と(二)で把握したところの方法でもって解釈すると、どうなるであろうか。

まず、(二)によって株式会社が歴史的に設定されることが必要になる<sup>⑥</sup>。そして株式会社が体现している精神の解明は、すなわち「会社人種」の解明は、

⑤ P・バラン；P・スウィージー『独占資本』小原敬士・訳。

⑥ 株式会社が歴史的に設定することについて——資本機能の把持のために大量の資金を調達する必要に迫られたとき、産業資本家は生産手段にたいする所有の危険を冒して資本の動化(Mobilisierung)—馬場克三—をおこなう。資本家に資本の動化をおこなわしめる状況は論理的に導出されるのではなく、歴史的にあたえられる。ただし、このような状況は、ある関係性を前提としており、この関係性は論理的に導出される。「いまや利潤の一方の部分、一定の規定を与えられた資本にそれ自体として帰属する果実として、利子として現われる。他方の部分、対立する規定を与えられた資本の特殊の果実として、したがって、企業者利得として現われる。一方は資本所有の単なる果実として現われ、他方は資本をもってする単なる機能の果実として、過程進行中の資本としての資本の、または能動的資本家の行なう諸機能の果実として現われる。そして、この総利潤の両部分相互の骨化と独立化、あたかも両部分が二つの本質的に異なる源泉から生じたかの如きそれは、いまや総資本家階級にとって、また総資本にとって確立されねばならない。」(『資』Ⅲの(一)467頁)ここで述べられている関係性の下で、資本の動化はおこなわれる。

したがって資本の所有と機能の分離ということも、関係性と歴史的状況の関連において説明されることになる。ここにおいて資本を所有すると共に資本を充用する機能資本家のほかに、単に資本を所有するだけの無機能資本家が設定されることになる。

(一)の構造の解明に帰着することになるだろう<sup>⑦</sup>。この点については、また後で論ずることになろう。

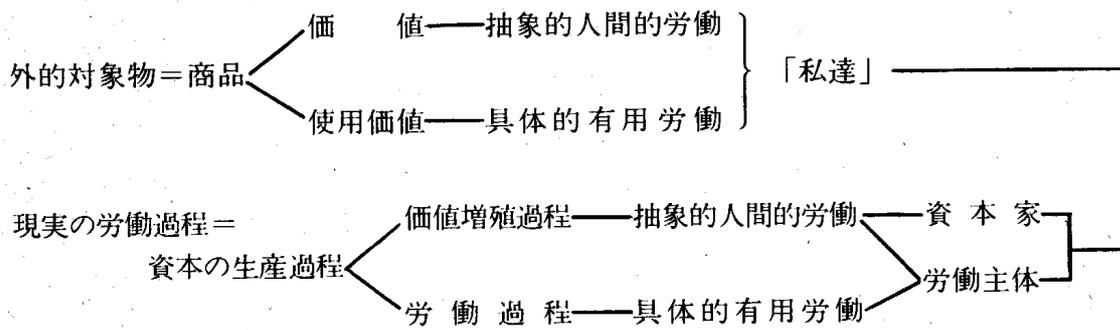
二

「以前には商品の分析から得られた、使用価値をつくるかぎりでの労働と価値をつくるかぎりでの同じ労働とのあいだの区別が、いまでは（「五章」）生産過程の異なった側面（労働過程と価値形成過程、価値増殖過程）の区別として示されたのである。」（『資』I 括弧・引用者 256 頁）と述べられているように「五章」は「商品に表わされた労働の二重性」、具体的労働と抽象的人間労働を承けて展開されている。

これはマルクスが強調してやまない『資本論』の最良の部分であり、経済学批判としての『資本論』の根幹である。

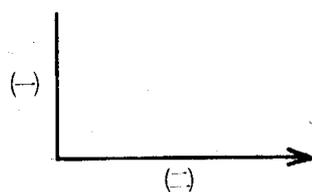
商品の章の「商品に表わされた労働の二重性」が示しているところの商品交換者としての「私達」は、「五章」で一層の具体化が図られることになる。

人々は商品および資本を分析して二様の労働を析出しているが、それらの



⑦ (一) 市民社会の関係性  $\begin{bmatrix} W - G - W \\ G - W - G \end{bmatrix}$

(二) マルクスの観察した具体的歴史的事実。



縦軸に関係性、横軸に具体的歴史をとると、現実の解釈は(一)と(二)の結合によってなされる。マルクスにあっては、歴史と論理という場合の論理とは、関係性の設定をめぐるものである。

相互関連あるいは何故二様の労働が析出されたのか、ということを知ることができなかった。

このことは次のようにいうことができる。「商品に表わされた労働の二重性」を把握できなかった彼らは当然のことながら「現実の労働過程」の二重性をも把握できなかったと。彼らは貨幣の概念の把握に失敗したと同じように資本概念の把握にも失敗したと。

彼らの資本概念の検討を通してマルクスは「五章」の最初に述べている。「資本の生産過程」にたいする考察は、それをまず「いかなる特定の社会的形態からも独立に考察」することから始めるべきであると。（『資』I 231 頁）「五章」の解釈をこの点から始めることにしよう。

私達は 1857 年の「経済学批判序説」でこの点の解釈に参考となるような叙述を見出すことができる。「すべての時代の生産は、一定の特徴を共通にもっており、共通の規定をもっている。生産一般とはひとつの抽象であるが、しかしそれは共通のものを現実に浮きださせ、固定させ、それによってわれわれのくりかえす労をはぶくかぎりでは、ひとつの合理的な抽象である。」（『経済学批判』289 頁大内・武田訳）

このような意味あいにおいて「一節、労働過程」は解釈できるであろうか。もう少しマルクスのいうところを聞いてみよう。

「しかし、もっとも発達した言語がもっとも発達しない言語と法則と規定とを共通にもつとしても、その発達をなすものこそ、まさにその一般的なものおよび共通なものからの区別なのであって生産一般にあてはまる規定が区別されなければならないのはまさに、——主体である人間と客体である自然とはどこでも同じだということからすでに生じる——同一性に気をとられて本質的な差別が忘れられないためである。」（『批判』290 頁）

生産一般にあてはまる規定がその発達をなすものから区別されることの重要性が指摘されているのであるが、この点を「五章」にあてはめると「一節」は生産一般の規定、「二節」はその発達しているところのもの（＝歴史規定）が叙述されているということになるのであろうか。仮にそうであるとしても

解釈すべき重要なことはこれからである。

すなわち、生産一般の規定が抽出されるということは歴史規定も同時に抽出されているということであって、一般的なものが抽出されて、しかる後に歴史規定が得られるというのではない。マルクスも述べているように人は通常、「主体である人間と客体である自然とは」いかなる歴史段階においても同じであるというところから、換言すると、物的代謝それ自体はいかなる時代においても遂行されているところから、日常観察されるところの現実の労働から共通の規定を抽出する。そして「生産用具」を資本と命名することによって現在の社会的諸関係の永遠性を主張する。

もちろん、これはマルクスがいうところの歴史規定が彼らに欠如しているということなのであって彼らは彼らの方法で歴史区分をおこなっている。例えば、A・スミスのそれは生産力の観点から各歴史段階の区分をおこなっている。

マルクスと彼らが歴史把握に関して決定的に相異している点は彼らの観察対象が主体の外に存しているのにたいしてマルクスの場合は主体がそのなかに含まれているという点である。換言すると、マルクスにとって生産（労働）過程の共通規定が認識できるということ、それが歴史的なることになっている。

「労働一般」というもっとも単純な抽象は「すべての社会形態にあてはまるきわめて古い関連を表現しているのではあるが、やはりこうした抽象としてはただもっとも近代的な社会のカテゴリーとしてだけしか、実際にも正しいものとしてはあらわれないのである。」（『批判』318頁）かくして「五章」の解釈は、まず「いかなる特定の社会形態」からも独立の規定が述べられているところの「一節」と資本主義社会の特徴づけが述べられているところの「二節」が同時に設定されているという点を念頭にその方法を解釈しなければならない。

「一節」と「二節」の区分は現実の労働の二重性に帰因するところのブルジョア経済学者達の混乱、すなわち彼らが無意識的に身におびた二様の認識

を切開するために必要な構成である。

彼らの認識が依拠している関係性(一)を「はじめから事物化された関係態として外観するのではなく、いったんそれぞれの側から関係行為する当事主体に内在することを媒介するときにはじめて、それはひとつの矛盾として対立するものの統合として把握」<sup>⑧</sup>し得る方法、すなわち価値形態論で示された方法の適用である。——労働の二重性——それは後期マルクスが『経哲草稿』段階におけるロマン派風の人間学をいかに論理的に乗り越えているかを示すものである<sup>⑨</sup>。

⑧ 真木悠介・同上、136頁。

⑨ 『経・哲草稿』(城塚・田中訳岩波文庫)から『資本論』への「連続」と「断絶」について簡単に述べることにする。(A)「労働は富者のためには驚異的な作品を生産する。だが労働は労働者には赤貧をつくりだす。それは宮殿を造営する、しかし労働者には穴ぐらをつくりだす。それは美を生産する、しかし労働者には不具をつくりだす。それは労働を機械に代えるが、しかしそれは、労働者の一部を野蛮な労働に逆戻りさせ、そして他の一部を機械とならせる。」(90頁)

「労働過程の観点の下に生産過程を考察するならば労働者は……彼の目的に合致した生産的活動の単なる手段および材料としての生産手段に関係をもったのである。……価値増殖過程の観点の下で生産過程を考察するときは。……生産手段は、ただちに他人の労働を吸収するための手段に転化した。もはや労働者が生産手段を使用するのではなく、生産手段が労働者を使用するのである。」(『資』I 402頁)

私達はこれら二つの叙述—疎外された労働の見取り図—のうちに問題意識や視角の連続を読み取ることができる。

しかし、これらの叙述が位置づけられている論理は相異している。

『草稿』においては上述のような現実の解釈はある理想的な状況が前提とされている。

それは次のように述べられている。(B)「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間の本質の現実的な獲得としての共産主義、……この共産主義は完成した自然主義として＝人間主義であり、完成した人間主義として＝自然主義である。それは人間と自然とのあいだの、また人間と人間とのあいだの抗争の真実の解決であり、現実的存在と本質との、対象化と自己確認との、自由と必然との、個と類とのあいだの争いの真の解決である。」(130頁)

(A)において読むことができるような解釈は(B)に依拠した国民経済学の批判によって補強されている。それは国民経済学の諸概念を人間(＝労働主体)に還元することによってなされている。それは国民経済学における「物質的な直接に感性的な私有財産 (Privateigentum)」を主体と客体との関係に還元しているところで読みとることができる。したがって、マルクス自身の論理内では Privateigentum は、私的所有と訳するのが適切であろうが、国民経済学の論理を批判している場合は主体の外側にある対象物という意味で私有財産の訳語が適切である。(『草稿』309頁、城塚氏の解説参照)(『唯物史観と経済

「労働はまず第一に、人間と自然とのあいだの一過程である。すなわち、人間がその自然との物質代謝を、彼自身の行為によって媒介し、規制し、調整する過程である。……彼の外にある自然に働きかけ、これを変化させるとともに、同時に彼は彼自身の自然を変化させる。……蜘蛛は織匠のそれに似た作業をなし、蜜蜂はその蠟房の構造によって多くの人間の建築師を顔色なからしめる。しかし、最悪の建築師でも、もとより最良の蜜蜂にまさるわけは建築師が蜜房を蠟で築く前に、すでに頭の中にそれを築いているということである。労働過程の終わりには、その初めにすでに労働者の表象としてあり、したがって、すでに観念的には存在していた結果が出てくるのである。」

(『資』I 232頁) マルクスは、かかる労働、活動規定、すなわち具体的有勞

学]梅本克己, 23頁)

マルクスのこの読み方は、「マルクス経済学」形成の出発点であり、その方法は基礎である。(105頁)『資本論』まで一貫している視点であり、深化していく論点である。

換言すると、国民経済学を(B)人間の内に取り込んで、その基盤の狭隘さをまず明確にし、それらの諸概念を批判する。例えば、私達にとっては当然のことに思われる点が多マルクスにかかる「国民経済学は就業していない労働者、この労働関係の外部にいる限りでの労働人間を認めない。」という批判となる。「労賃」は「他の一切の生産用具の維持、修繕、また資本一般の利子を伴って再生産されるに必要な消耗、車輪を回転させるために使われる油などと、まったく同じ意味をもっている。」(109頁)ということになる。——マルクスは他の遊星から落ちてきた人のようであった。——国民経済学の基礎についてマルクスはいう。

富の源泉が労働一般であることを把握していたスミスやリーカードは、不具化された人間を、すなわち「非本質としての人間を本質」(122頁)とみなしていた。だから「現実の矛盾は彼らが原理として認識したところの矛盾にみちた本質に完全に対応している。」(122頁)

したがって、マルクスに依ると、彼らの論理では矛盾の根本を把握することはできない。『草稿』段階における国民経済学批判の基盤は(B)にある。しかし(B)は何らの検証もなされてはいない、それはマルクスの信念とでもいい得るものである。不具化された人間を描写し、それが人間の本性に由来しているとする国民経済学にマルクスは憤激している。ヘーゲル、フォイエルバッハからの離脱という脈路からみるならば(B)は残滓ということになるかもしれないが私はむしろ(B)がどのように消化され論理化されていったのかをみるのが要点であるようにおもっている。

赤羽氏は、「マルクスは国民経済学が対象としていた資本制生産の諸事象、諸法則を理解するために基礎概念として、あるいは主語として疎外された労働をもってすることを主張しながらも、疎外された労働が、主語である理由、基礎概念である理由を何ら論

働の規定に立脚しているからこそ現実の労働過程を疎外過程、奴隷化過程として把握し得る。これは『経・哲草稿』での「疎外された労働」による現実解釈が「生命活動の様式のうちには一種属の全性格が、その類的性格が横たわっている。……人間は自分の生命活動そのものを自分の意欲や自分の意識の対象にする。……まさにこのことによつてのみ、人間は一つの類的存在なのである。」(『草稿』城塚・田中訳・95頁)という人間規定に立脚しているから可能であるのと同じである。決定的な差異は、この人間規定が抽象的労働によつて表示された人間と相即不離の関係にあること、そして既に述べたように、それらは労働主体の二重性として商品交換の関係のうちに設定されていることである。

---

証せずア・プリオリにそれをいうのである。)(『思想』1969年5月号45頁)と述べている。(「疎外された労働」概念は前述したように(B)を前提としていることを想起)

しかし、(B)と「疎外された労働」概念——その具体的内容は(A)であるが——の関係を考察するとき、そこには、国民経済学の方法に対置されたマルクス独自の方法を読むことができる。(B)は何らの検証もなされてはいない。しかし、(A)と(B)の関係は、例えば「国民経済学者は論証すべき事柄、すなわち、分業と交換といった二つのもののあいだの必然的な関係を事実とか出来事というかたちであらかじめ仮定しているのである。」(86頁)という方法に対置したものなのである。マルクスはこの方法の誤りが諸概念の発生を明確にし得ないこと、そして結局、現状の永遠性を語ることになってしまうことに気がついている。

真木氏の表現を借用すると「ここでは既成体としての事実内に在り、物象化された事実を立脚点とする分析理性の方法にたいし、これらの物質的「諸形象」・諸法則をその生成の論理において解明し把握する弁証法的理性の方法が端的に対置されている」(同上、13頁)ということである。

1857年の「経済学批判序説」での「経済学の方法」でのように明示はされていないが核心はとらえている。それは、彼が自分自身の思考方法、および自分自身の存在の歴史性、限定性を検討している作業で読むことができる。

神の手によつてはじめられた歴史ではなくして人間による歴史を把握するための困難をマルクスは語っている(145頁)そして、その困難克服の努力をすなわち、『資本論』の最初の言葉(=商品)に到達するための努力をおこなっている。

「君が自然と人間との創造について問う場合、君は人間と自然とを捨象しているのだ。君はそれらを存在しないものとして措定しておきながら、しかもそれらを存在するものとして私が君に証明することを君は要求しているのだ。そこで私は君にこう言おう、君の捨象をやめたまえ、そうすれば、君はまた君の問いをやめるだろう。それとも君が君の捨象に固執しようとするなら、首尾一貫したまえ。そして君は人間と自然とを存在し

さて、マルクスは剰余価値の源泉を発見したことによって「労働過程の単純な諸要素」すなわち「合目的な活動、または労働そのもの、その対象、その手段」の相互関連、結合を関係概念（不変資本、可変資本）で表現することができた。「経済学の抽象的諸範疇」をその質料的内容から分離させることができた。それは「労働過程の単純な諸要素」をすべて量に還元することを可能にし、しかもそれらを自己増殖という運動体として説明せしめた。「問題の条件はすべて解決されており、しかも商品交換の法則は侵害されていない。」（『資』I 253頁）かくして、事物と関係概念の結合（労働主体への内在化）を可能にしたものは、労働力商品の特性であった<sup>10</sup>。

現実の労働過程における労働主体の二重性（疎外された労働とそれを認識

---

ないものとして考えながら、考えを進めるのなら、君もまたやはり自然であり人間であるのだから、君自身を存在しないものと考えたまえ。考えるなかれ、私に問うなかれ、なぜなら、君が考え、そして問うやいなや、君がしている自然と人間との存在についての捨象は無意味となるからだ。」（146頁傍点引用者）

引用者）

マルクスは従来の人間諸科学の誤りの根本を糺し、自らは自然と人間の設定という課題を背負うのである。

「自然と人間との創造」についての問いに対するマルクスの一刀両断の解答は次のとくである。

「社会主義的人間にとって、いわゆる世界史の全体は、人間的労働による人間の産出、人間のための自然の生成以外のなにものでもないのであるから、したがって彼は、自己自身による自己の出生について、自己の発生過程について直観的な、反対できない証明をもっているのである。」（147頁傍点引用者）

この解答が不十分であることは既に述べてきたところから明らかであろう。現実の生活の外側から、現実の生活より生じてくる観念（自然と人間の創造）の物神性（145頁）を糺すというマルクスの方法は、何故、現実の生活の外側に位置し得たのかを明示しないかぎり、マルクス自身が神になってしまうことになる。マルクスはこの不十分性を意識している。それは、なんとか(B)を現実(A)の内に入れようとしている、あるいは(B)と(A)の一致を図ろうとするところにみられる。ここで自然科学の役割が強調されるのである。自然科学の発達とは主体と客体との境界（主体の対象化）を画定する。

私的所有の積極的止揚についてのマルクスの基本的認識——「人間的な本質と生命、対象的な人間・人間的な制作物を人間のために人間によって感性的に自分のものとする獲得」（136頁）——は主体と客体との境界を起点としたものである。

人は動物的な諸機能においてのみ自分を感じずという徹底した非人間化、「絶対的な貧困にまで還元」（137頁）させることによって私的所有の止揚を俎上にのせることができたのである。「自然科学は産業を介してますます実践的に人間生活のなかに入りこみ、そ

(感得)せしめる活動)をマルクスは次のように述べている。「価値形成過程を労働過程と比較して見るならば、後者は使用価値を生産する有用労働である。運動はここで質的に考察される。その特別な仕方において、目的および内容にしたがって。同じ労働過程が価値形成過程においては、その量的な側面からのみ示される。もはや問題となるのは、労働がその作業に要する時間のみであり、あるいは労働力が有用に支出される継続時間のみである。」(『資』I 254 頁)

能動性、創造性として規定された労働と賃労働はまさにメダルの裏表の関係にある。

賃労働は「それ自身労働の特定の内容、その特別な有用性あるいは、それ

---

れを改造し、そして人間的解放を準備したのであるが、それだけますます直接的には自然科学は非人間化を完成させずにはやまなかった。」(142 頁)かくして、マルクスは具体的な日常生活(A)のなかに(B)を位置づけるのであるが、『草稿』では(A)と(B)の関係の展開はなされていない。

- ⑩ 置塩氏は、マルクスの労働価値説について述べている。「生産費説に対する労働価値説よりの批判を検討することにより、生産費説が価格形態自身の分析を欠き、利潤の源泉について答え得ないことを知った。①価格形態自身の分析を欠くことによって資本制社会の歴史的過渡性を不問に附し、②利潤の源泉を問わないことによって、資本制社会の敵対的性格をおおいかくす役割を果たしている。われわれはこの経済学における二つの根本問題に、労働価値説のみが答えることができることを示す。」(『マルクス経済学』14 頁置塩信雄①、②は引用者)しかし氏が詳細に論じているのは労働価値説が利潤の源泉を説明しているという点だけである。氏が述べているところの①と②の関連を氏は極めて外面的に結びつけているから、氏にあっては資本制社会の矛盾を生産の無政府性と階級対立から説明することになっている。(17 頁・注の 11)そして生産の無政府性と階級対立は生産手段が直接生産者でない少数の人々によって所有されていることから引きだされる。

氏にあっては、労働力(商品)の特性によって経済学が前提としているところ(価格  $> 0$ 、正なる利潤率の存在。)の内容が明らかになったことによって、労働価値説が階級対立の再生の説明の欠かせぬ要具となった。

氏は階級の発生する根本は不問にして独占資本と国家を悪の根源とするが、かかる主張を強調すればするほど、階級の発生への追求を不問にした危険性は大となる。

スターリンは生産手段の全人民の所有によって資本主義社会との違いを強調したが、その下で労働者、勤労者がいかなる状況におかれていたかは、いまではよく知られているところである。生産手段の全人民の所有とは何によって保証されるのかこの点こそが問題である。

氏の社会構図は善人と悪人の色分けから構成されている。したがって悪者退治のため

が表わされる独特の使用価値とは全然関係をもっていない」から、賃労働によって表現される労働主体の行動形態は量によって解釈することが可能となるのである。しかし現実の労働が量としてのみ評価されるようになればなるほど、人間は創造的労働、具体的有用労働への欲求を強める。

商品交換が全面的に展開していない社会における労働主体の相反する二重性格について一つの具体的事例をマルクスはあたえている。奴隷が主人によって「ものを言う道具」としての扱いを強化されればされるほど彼は「半ばものを言う道具としての動物やものを言わない道具を」を虐待し、熱情をもってそれらをだいなしにする。(『資』I 255頁) 彼らはこのようにして人間としての確証を得ようとするのである。

---

の労働者の団結と統一が容易でないのは、敵のイデオロギーに一部が取り込まれたからであり、またイデオロギー攻勢に屈しないものには暴力的な断圧があたえられているからであるという。そして善人の核は敵に取り込まれている労働者を覚醒させるために一層の教育を彼らにほどこさなければならないという。(「現代における生産力と生産関係」『経済学研究』32～36頁) 以上氏の主張は明解である。氏の解釈したマルクスの価格論、蓄積論はマルクスの論理を発展させたとおもっている。

しかし私は前述したところの労働価値説を階級対立の再生を説明する要具としている点には不満であり、誤りであるとおもっている。氏はどのようにして善人と悪人の判定を下しているのであろうか。

現代社会における巨大株式会社は個人が所有しているというよりも機関所有である(『大企業における所有と支配』三戸・正木・晴山)ことは氏も承知されていることとおもう。

しかし、氏は主張される。「ある少数の私人が生産に関する決定を独占できるのは生産手段の私有制が存在するからである。」(「生産力と生産関係」39頁) 新しい社会のためには「生産手段の私有を廃すること」が必要である。それは「社会構成員のすべての人々が生産に関する諸決定に関与できる状態にあることを意味する。」

いかにして、これは保証されるか。氏が述べておられるところは現代資本主義社会の意志決定機構とどれほどの差異があるであろうか。「労働者がその生産活動の諸結果を予望し、もくろみを立て、意見を述べ、協議された計画をつくることが行なわれねばならない。」

しかし、これらは全経済レベルで調整されねばならない。(40頁) したがって、このレベルでの計画作整担当者は「生産に関する決定について、他の社会構成員と比較して著しい程度に関与する。」そして氏は主張する。

「それ故、社会の全構成の生産決定への関与を保証するためには、この担当者の任免は、社会の全成員の意志に従って行なわれねばならない。」と、——議会制民主主義の下で私達は選挙によって代表者を選出している。——また続けて「選出された担当者への

A. シュミットが次のように説明するとき、それは労働の二重性を基底としなければならない。「マルクスは、すべての人間的本質力の解放というかれの要求を、ブルジョア社会の二重性の分析から、すなわち、かれによればこの社会はたんに人間の不具化を生み出すのみならず、また人間の究極的解放の手段をも生み出すということを本質とするような二重性の分析から導き出す。」<sup>⑪</sup>

シュミットが「この社会は人間の不具化を生みだす」と解釈したとき、『資本論』を解釈している本稿は続けてその機構を、すなわち再生産の機構を追求しなければならない。なぜなら、初期においてすでにマルクスはこのような見取図をもっていたのだから。

マルクスは抽象的労働によって対象（＝状況）を構成し、その状況の外側に位置してそれを分析（＝解釈）する。状況の外側にマルクスが位置することを可能にしたのは具体的労働の規定によってである。

そしてこの両者の関係は次のようになっている。(i)抽象的労働によって構成される対象の拡大（＝資本の文明化作用）は決して労働主体をその状況の内に取り込んでしまうことはできない。

ピアジェがいうところの「人間諸科学の困難」（「人間諸科学の中心的な認識論的困難は、人間自体が研究の主体でもあり、客体でもあって、しかもこの客体が意識する主体であるという事実によって、さらにいっそう困難の度を加えている。<sup>⑫</sup>」）は労働主体の二重性によって極めて巧みにマルクスにあっては乗り越えられている。

---

監視機構、任免機構、教育機構の改善、社会の諸構成員の教育、社会諸活動の改善など、これらの諸活動を行なう意識的人間の存在。」（41～42頁）

氏にとって「新しき社会」と「現代資本主義社会」の決定的差異は制度を運営する善人がいるか、いないかに帰着することになってしまうのではなかろうか。しかも氏だけが善人と悪人を区別し得るということになっている。氏のマルクスの論理の解釈は根本的なところで誤っているように私にはおもえる。

⑪ A・シュミット『マルクスの自然概念』172頁。元浜清海・訳。

⑫ J・ピアジェ『人間科学序説』155頁、波多野完治・訳。

『資本論』の序文で述べられている「初めの困難」とはまさにこれであった。

「商品に表わされた労働の二重性」がその「困難」克服を示していることについては既に述べた。ここでは、主体に内化された二重性が労働を通して諸概念の獲得をおこなっているということに注目すべきである。

労働過程は「使用価値をつくり出すための目的に合致した活動であり、人間の欲望のための自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的条件であり……」（『資』I 239頁）ということであるが、それはまた諸概念を産出する過程でもある。

人は仲々この点を理解できない。

だから、マルクスにいわせると彼らは諸概念の内的関連およびその再生を理解できないということになる。

マルクスは次のようにいう。「教授大先生にあっては、人間の自然にたいする関係は、はじめから実践的な関係ではなく、つまり行為によって基礎づけられた関係ではなくして理論的關係」であると。そして彼らの方法を批判する。「『価値』という経済学的範疇を一つの『概念』から演繹するのが、ドイツの一経済学教授の『自然的志向』であって、このことを彼は、経済学で普通に『使用価値』とよばれるものを、『ドイツ語の慣用にしがって』『価値』そのものと改名することによってなしとげる。そして『価値』そのものが発見されるやいなや、それはこんどは逆に『使用価値』を『価値』そのものから演繹する」<sup>13</sup>という彼らの遊戯を批判している。

表象された具体的なものを分析して、もっとも簡単な範疇を得たら(下向)、それを起点として具体的なものに到達する(上向)というのがマルクスの方法であることは、いまさら述べる必要もないであろう。そして近代社会の経済的運動法則を闡明することを究極の目的とした『資本論』の叙述に上向方法が適用されていることも周知のことであろう。私はあらためて次のことに注意を喚起しておきたい。「上向する方法は、ただ具体的なものを自分のもの

⑬ マルクス・エンゲルス全集(19)363頁。

にするための、それを精神のうえで具体的なものとして再生産するための思考にとっての仕方にすぎない。」(『批判』313頁)とマルクスは述べているが、この上向方法と経済的運動法則の関係が『資本論』を解釈するさいには常に念頭になければならない。

あたえられている諸概念(例えば「賃金」「利潤」「利子」等々の諸概念)の内的関連および再生を明確にするという上向方法がまた社会の運動法則を闡明しているという『資本論』の展開を解釈しなければならない。

その場合、要点は上向方法を採用した研究者(=マルクス)と歴史の推進者である労働者は、諸概念の産出者であるとともにその獲得者(解読者)として一致しているという点である。

本稿が対象とした「五章」はかかる意味においてその一致が示されており、『資本論』の根幹を形成している。

(イ)で示された関係以外にさらに二つの関係が考えられる。

(ロ)まず抽象的労働が具体的有用労働を取り込んでしまう場合、具体的労働によって表示されている性格が消失してしまう場合。換言すると、人間に関することは全て量に還元されてしまうという状況。

それから、その逆の場合、(ハ)それは『草稿』で語られている共産主義の世界。そこでは、「国民経済的な富と貧困とにかかわって、ゆたかな人間とゆたかな人間的欲求とが現われることをわれわれは見いだす。ゆたかな人間は、同時に人間的な生命発現の総体を必要としている人間である。」(『草稿』142頁、城塚・田中訳)あるいは、『要綱』における歴史の第三の段階(『経済学批判要綱』高木訳I 79頁)である。

ところで、これら三つの関係、(イ)、(ロ)、(ハ)はどのように位置づけられるであろうか。

(イ)は抽象的労働と具体的労働との拮抗による動的過程を示していると解することができるが、(ロ)、(ハ)は(イ)の帰着点を示しているということになるだろう。

したがって、動的状態として(イ)→(イ)とそれから(イ)→(ロ)、(イ)→(ハ)という想定

があたえられるがマルクスの主張しているところから(イ)→(ロ)の想定は除外できるであろう<sup>⑭</sup>。

私はマルクスが先行する諸理論を検討して「労働の二重性」概念を獲得したということ、そしてそれを主体における抽象的労働と具体的有用労働との拮抗と解釈した<sup>⑮</sup>。(イ)が展望されているとするならば、その拮抗は当然具体的労働が結局には優位をもつであろう。

私はマルクスは、(イ)を展望していたと解している。ただマルクスは拮抗過程において具体的有用労働が優位を占めていくことを深く追求していない。それは、時代の制約から実践(=革命)が絶対的な解答としてマルクスの脳裡に去来したことによるのであろう。

しかし、この解答は安易に使用されると、マルクスの論理を根在からくつがえしてしまうことになる。労働者が所有者につながれている「見えざる糸」を断ち切るというこの解答は、しばしばマルクスの構想したところに反して——粗野な共産主義——(『草稿』128頁)を喚起し、それは労働者をより強く「見えざる糸」で所有者に吸引する。

(イ)→(イ)の想定については、まず拮抗過程が、(ロ)にゆきつくか、(イ)にゆきつくかを予定せずしてそれ自体が考察できるのであろうかということが問題とされねばならない。

換言すると、(イ)それ自体の存立規定、限定性はどこに求められるのであろうか。

(イ)がそれ自体として設定されているとするならば「搾取」とか「物神性」というような概念で表わされたマルクスの歴史規定の構造はどのようなものであろうか。

マルクスはこれらのことを問題とはしていない。(イ)を展望しているのであるから。)

⑭ 例えば、「資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(『資』I 952頁)という有名な文句がそれを示しているであろう。

⑮ 拙稿「商品に表わされた労働の二重性」を参照。『山口経済学雑誌』27の1・2号。

それはまた次のようにもいえる。

「労働の二重性」概念でもって資本の一構成要素である関係性〔W—G—W・G—W—G〕を認識したマルクスは、しかしこの関係性を生ぜしめているものの解明には向かわなかった。換言すると、関係性を体現している労働主体の二重性格の根本への探求はなされていない。労働主体の二重性格の根本を探求するということは、実はまた拮抗過程のメカニズムの探求でもあるのだが。

しかし、仮に抽象的労働を主体の対象による拘束性として、具体的有用労働を対象への能動性として、そして労働主体の二重性をこれらの均衡・不均衡を示すものとして解するならば、マルクスの歴史規定の再検討という課題はなくなるであろう。なぜならいかなる社会形態であろうとも、この拘束性と能動性という規定は貫徹するであろうから。

あるいは、人間の本性、人間のあり方を追求する精神分析学からのマルクス理論の解釈によるならば彼の歴史規定はかなり相貌を変えることになってくる。

例えば、ブラウンはいう。「もし、この問題（疎外された労働）の原因が、（暴）力であるとするならば《搾取者たちから搾取する》ことだけで充分である。しかし、もし主人の支配が（暴）力によるものでないとすれば、奴隷は自分自身の鎖に愛着を持っているのかもしれないということも考えられる。もしそのような深刻な心理的な疾患があるとすれば、さらに深い心理上の革新が必要となる<sup>⑯</sup>」ここでブラウンが問題としていることは、〔W—G—W・G—W—G〕の関係性の根拠を追求することの必要性である。彼はマルクスを次のように批判している。マルクスにあっては「経済学の最後の範疇は力である。しかし、力は経済学の範疇に入らない。マルクスは彼の理論の巨大なギャップを力（暴力）の——すなわち物質的現実としての力を所有すること——によって埋めている<sup>⑰</sup>」そして、ブラウンは関係性を生ぜしめたものは

⑯ N・O・ブラウン『Life Against Death』, 邦訳『エロスとタナトス』248頁秋山・訳。括弧・引用者

「猿から人への推移の中に起こったのである。」という。

本稿ではブラウンが解釈している人間の本性について紹介していく能力も余裕も私にはないので、『資本論』の分岐点の存在するところを指摘するにとどめざるを得ない。

最後に、マルクスの(イ)→(ロ)への論述について少しばかり述べておきたい。

資本主義社会の出口——(ロ)への道——を指示するものとして、マルクスは技術体系の高度化を背景にした大工業が「全体的に発達した個人」を生みだし、資本は彼を必要とせざるを得ない事態について述べているが(『資』I 613頁)——これは「不変資本と可変資本」の章で読むことができるように、価値を移転する労働(具体的労働)は価値を創造する労働(抽象的労働)でもあるということに基づいている<sup>⑭</sup>。

このような産業労働の人間化についての展望は、熊沢氏が指摘されているように「現代においては専門の欠如は専門性を越えた全人格性をいささかも保障するものではない<sup>⑮</sup>」ということであって、私には悲観的である。しかし次のような説明は(ロ)への道を指示するものとして検討されるべきであろう。

「自由の国は、実際、窮迫と外的合目的性とによって規定された労働が、なくなるところで初めて始まる。……未開人が、彼の欲望を充たすために、彼の生活を維持し、また再生産するために、自然と闘わねばならないように、文明人もそうせねばならず、しかも、いかなる社会形態においても、可能ないかなる生産様式のもとにおいても、そうせねばならない。文明人が発展するほど、この自然必然性の国は拡大される。諸欲望が拡大されるからである。……この国の彼方に、自己目的として行為しうる人間の力の発展が真の自由の国が、といってもかの必然性の国をその基礎としてそのうえにのみ開花しうる自由の国が始まる。労働日の短縮は根本条件である。」(『資』IIIの(二) 1024頁)

⑭ N・O・ブラウン、同上、257頁。

⑮ 拙稿「不変資本と可変資本について」『山口経済学雑誌』24の1・2・3号。

⑯ 熊沢誠『労働者管理の草の根』114頁。

労働日の短縮が自由の国への根本条件となるためには、資本が創出する欲望に対抗して労働者は自分自身の欲望（＝文化）を創らねばならない。それは、いかに生産性が高まり、使用価値量（＝物財）の増大をもたらしても、資本は当然のことながら労働者もそれを労働時間の短縮の方向には作用させないということである。資本の創出する欲望は使用価値の浪費を促進し、それがまた労働者の資本への従属——資本の創出する欲望の受容——としてより一層の商品生産へと彼らは進む。この循環経路の切断は労働者が自分自身の欲望を創ることによってなされるであろう。労働日の短縮が自由の国への根本条件であるとは現代的にはかかる意味においてであろう。

労働者が自らの欲望を創造する闘争は直接的には生存の窮迫、貧乏を基盤として現象しないため一見、観念的なそして本来的な課題から外れているような印象をあたえるが、価値生産物をめぐっての闘争は、今やいやおうなく生活の質を問う、生活手段の中味を問わざるをえない段階に至っている。

自然は人間にとって素材として相対しているが、それは容器としての存在を前提されてのことである。人間が自然をいかに人間化し、加工しても人間が自然の一要素であることから脱却し得ない。

資本による労働過程の包摂以降、資本の文明化作用、生活支配はめざましいものである。資本は、最初から自然の一部を労働手段として利用してきたが、いまや労働者に自らの生産物でもない空気、水、陽光さえも買わせるに至っている。

それは「資本主義の発展が最終段階に入り、生産の全面的な社会化へあと一步のところまで到達した段階で、自然からの社会に対する恐るべきフィードバック作用として人類全体におおいかぶさってきている問題」<sup>②</sup>を示している。この傾向は強まりこそすれ弱まる状況にはない。これらの価格は資本の創出する欲望と労働者の創る欲望（＝文化）との拮抗において成立しているといえる。

したがってマルクスの予測したように資本制大工業は意図せざるごととし

② 置塩信雄「現代における生産力と生産関係」神戸大学『経済学研究・21』21頁。

て労働者に自由なる時間を創出するのではなくして、それはいやおうなく、どちらか（口かい）の選択を迫っているのである。

かくして、資本主義社会の出口の解釈は、最初に問題となった関係性の解明にと再び直面することになる。

### 補論

1863年から64年にかけて執筆されたとおもわれる『資本論』の準備ノートのうちにある「直接的生産過程の結果」（『資本論綱要』向坂・訳以下『綱要』）の第二項「資本主義的生産は剰余価値の生産である」には、本稿が解釈しようとしている「五章、労働過程と価値増殖過程」と照応している部分が多く存在している。

「五章」の解釈をたすけるために第二項の検討をおこなうことにする。

本来的にはこの準備ノートにある「絶対的剰余価値」を検討の対象とすべきであるが、ここでは第二項を対象とする。

『資本論』の整理された論述を念頭にしている私達にはこの第二項が全体としては未整理であるということは容易に認められる。

そして、二項の各部分の各論述を『資本論』のそれぞれの部分に照応させ、『資本論』解釈の傍証にすることは簡単な作業であるだろう。

しかし、このような利用の仕方は二項の生命を断つことになるだろうし、また『資本論』を解釈する妨げとなるだろう。

出来上った『資本論』に比較すれば二項は不十分であるが、それでもその各部分、各論述はやはり、それらに生命をあたえているところのある体系に位置づけられているはずである。解釈者はこの体系をこそ読みとらなければならない。いうまでもなく、「五章」は二項が問題としている領域を經由して整序されたのである。

二項においてまず気がつくことは価値の実体は「抽象的人間的労働」としてよりも「一般的社会的労働」と規定されている。

『経済学批判』（以下『批判』）における関係性（＝貨幣）の設定においてそ

の役割を果たした規定は「一般的社会的労働」であり、『資本論』においては「抽象的人間的労働」であったということを想起するならば、この準備ノート段階における関係性の設定の枠組は『批判』の延長線上にあることが予想される。

内田氏は、文献考証からこのノート「直接的生産過程の結果」が『批判』の延長線上にあると述べておられる<sup>②</sup>。

私は、まず二項の中味に入っていくことにする。(I)「商品を『労働』に約元するだけでは充分でない。二重形態における労働、すなわち労働が一方では具体的労働として商品の使用価値の中に表現され、他方では社会的に必要な労働として交換価値の中に数えられるという二重形態の労働に約元されなければならない。……第一の側面からみれば、事柄は商品の特定の使用価値、特定の物的存在に表現され、第二の側面からみればそれが……貨幣に表現される。第一の側面からすれば専ら労働の質が問題であり、第二によれば単に労働の量が問題である。第一によれば具体的労働の相違は分業に現われ、第二によればその無差別な貨幣表現の中に現われる。」(『綱要』145頁)

マルクスは商品を二重の形態の労働に約元することによって「生産の資本主義的形態をその絶対的形態と考え、それ故にまた生産の唯一の自然形態と考えるブルジョア的愚昧さ」(『綱要』209頁)を脱することができるという。しかし、『批判』における関係性(=貨幣)の設定方法ではブルジョア的愚昧さを批判することはできてもその愚昧さの生ずるところを把握することは困難である。

その批判をマルクスは生産過程を労働過程と価値増殖との両面から考察することによっておこなっている。(この場合の労働過程と価値増殖過程の把握方法は、『資本論』のそれとは異っている点に注意!)

これは商品を二重の形態の労働に約元することができた帰結である。したがってまた経済学者達がブルジョア的愚昧さを脱することができないことについては次のようにいうことができる。

② 内田『マルクス・コメンタール』95頁。

「労働過程を独立したものとして、しかも同時に資本主義的生産過程の一面として理解することが」(『綱要』155頁)できないが故にと。これは彼らが商品に表わされた二つの労働を混同した帰結である。

さて問題とすべきは「生産過程はその直接の成果である商品が使用価値と交換価値の直接的統一であるのと同様に、労働過程と価値増殖過程の直接的統一である。」(『綱要』143頁)というマルクスの説明である。

〔I〕において述べられている次の点に注目してみよう。「第一によれば具体的労働の相違は分業に現われ、第二によればその無差別な貨幣表現の中に現われる。」

これは、『批判』における貨幣設定の要点である。安藤氏は『批判』における貨幣設定の内容を次のように説明しておられる。「マルクスは、現在の交換経済組織から貨幣を除いたならばいかなる困難と矛盾がおこるかを考えているのではなかろうか。現にあるものを除いたがゆえに生ずる矛盾と困難が取り除いたものの復帰によって解決される<sup>②</sup>」私はこの説明に納得する。〈矛盾と困難が取り除かれた〉ということは貨幣を媒介とする交換経済組織が設定されたということになり、したがってその経済組織の下では、「労働過程が価値増殖過程として現われるのは次のことによってである、すなわちこの過程において附加される具体的労働(=私的労働)が社会的に必要な労働量であり(その強度によって)、一定量の社会的平均労働に等しいということ、またこの量が労働賃金に含まれたもの以上の追加量を表わすということによってである。」(『綱要』144頁(私的労働)は引用者)ということになるのである。

この『批判』の展開の誤りは容易に指摘することができる。

「具体的労働」(=私的労働)が「社会的平均労働」に等しいとされるということは、商品が実現される(売れる)ということである。

したがって、商品が売れたということによってその商品を作りだした労働過程は価値増殖過程となったということになるであろう。

逆に商品が売れなかったということになればその過程は価値増殖過程とは

② 『マックス・ウェーバー研究』安藤英二、69頁。

ならなかったということになるであろう。

ここでマルクスの労働過程と価値増殖過程の説明を想起するとき、その誤りのひどさがよくわかる。「現実の労働過程においては、労働者は労働手段を自己の労働の伝導用員として、労働対象物を自己の労働が表現される材料として利用する。……だが価値増殖過程の見地からすれば事態は異って現われる。労働者が生産手段を使用するのではなくて、生産手段が労働者を使用するのである。……生産手段は単にできるだけ多量の生きた労働を吸収するものとしてのみ現われる。」（『綱要』139頁）

労働者は彼らが作りだした商品が売れるか、売れないかによって現実の労働過程を価値増殖過程としたり、労働過程として認めるとしたりはしない。

ここではまだマルクスは労働過程と価値増殖過程に内包されているものの把握方法の重要性を認識していない。それは労働主体に内在化してのみ把握され得るのである。

これは『批判』においてみられるところの貨幣を設定する方法（観察された諸事実をある前提によって整理、分類するという）との区別がいまだ確立されていないということである。これら二つの方法の混在、格闘がこの二項の特徴である。

商品が売れなかったということは、その価格が高すぎたか、その商品が使用価値としての実を備えていなかったからであるだろう。しかし商品がその使用価値を有していることは前提とされていることだから、商品が売れなかった理由はその価格が高いということであろう。これはいうまでもなく「具体的労働」（量）が「社会的平均労働」（量）以上であったということになるのであるが、マルクスは暗黙のうちに「具体的労働」の規定をくつがえしている。「具体的労働」は量には還元され得ないというのがマルクスの説明であった。

そしてまた「具体的労働」は「私的労働」としても使用されている。「私的労働」が「社会的労働」に転化するというのが『批判』における貨幣の設定方法である。

「出発点は共同労働としての個人の労働ではなくて、逆に私的な個人の特定の労働、つまり交換過程のなかではじめてその本来の性格を止揚することによって一般的社会的労働であることを証明する労働である。だから、一般的社会的労働とは、すでにできあがっている前提ではなく、できあがってゆく結果なのである。そこでまた新たな困難が生ずる。」(『批判』48頁大内・武田訳) このような形式での貨幣設定はマルクスが述べているように、私有財産に基づく分業を前提としている。現実からの表象を論理化して得られた貨幣概念の射程は、やはりその現実の範囲内においてのみである。

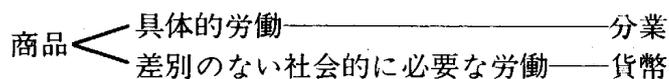
「思考上の産物をその前提たる現実の歴史から独立させ、しかも現実の歴史と同次元に並列させる」<sup>23)</sup>という『批判』におけるこの方法において「現実」をマルクスは「具体的労働」によって表示した。

すなわち「具体的労働の相違は分業に現われる」という場合の分業は私有財産に基づく分業であって、この個々の労働(=私的労働)の社会的労働への転化という仮定から貨幣を設定した。この方法は安藤氏に依るとマルクスをヴェーバーに至らせることになる<sup>24)</sup>。

「具体的労働」の規定は『資本論』に比して厳密ではなく、曖昧である。しかし、この段階においてはもちろん、それなりに一定の位置をあたえられ

<sup>23)</sup> 同上, 68頁。

<sup>24)</sup> 「現在の交換経済組織から貨幣を取り除いてみた場合の想定——このイデアル・ティプスが除々に現実に近づきついに貨幣形態に到達する。かくのごとく、まず現実関係の特定面をとりだし、形式論理的には解きえぬ矛盾を構成し、さてその形式的矛盾の引き出されてきた現実には、勿論かかる矛盾それ自体は経験的には見られないがゆえに、かかる矛盾が解決されたとすれば本来の現実に立ち戻る、というのがマルクスの意図であった。しかしてこのことたるや、まさにマックス・ヴェーバーの理念型概念の教えるところにほかならない。」(同上, 安藤, 74頁)



現実の労働過程(=労働過程) ———— 具体的労働 = 私的労働 = 現実の労働  
 価値増殖過程 ———— 差別のない社会的に必要な労働

※ 『資本論』では私的労働と社会的労働は等価形態の第三の特性として述べられている。「価値形態論」の展開は具体的労働と抽象的人間的労働によってなされている。

ている。

まず「具体的労働」は使用価値を生産する労働として観察されたもの（＝現実の労働）である。

人は現実の労働は賃労働であり、労働手段と原料を結合して使用価値を生産している労働であるにとらえている。

「一流の経済学教科書」（『綱要』151頁）において経済学者達はこの観察されたままの労働についてあれこれと相互の関連なく語っているにすぎない。

マルクスは現実の労働から対象の歴史的特徴を示す諸概念（貨幣とか資本）のうちに取り込めるものを抜き出してその過程を整序したのである。この段階のマルクスが把握していた「もっとも単純な諸規定」はそれが抽出された表象を多くの規定と関連をもつ豊富な総体とし得る動力を保持していない。

（『批判』312頁「経済学の方法」）それが現実の労働＝具体的労働という曖昧さのなかに示されているのである。もちろん、このような方法の克服（『資本論』）への道は二項においてもみることができる。

それは以上、述べてきたところの貨幣設定の方法が次のマルクスの説明とは相容れなくなっているところに示されている。

「生産過程を二つの相異なる見地から、すなわち、一、労働過程 二、価値増殖過程として考察しているのであるが、このことの中にすでに生産過程は単に唯一の不可分の労働過程にすぎないということが横たわっている。……ある使用価値をつくり出すために、……価値及び剰余価値をつくり出すためにという具合に二重に労働されるわけではない。」（『綱要』143頁）このように把握された現実、二様に考察され得る表象を労働主体に内在化して一元化することによって上述の設定方法は克服される。『資本論』と『批判』を分つ点である<sup>②</sup>。

② 拙稿「価値形態論の形成」『山口経済学雑誌』22の5・6号。